

南風 こまち

『では、本日の講義はここまでです。お疲れ様でした』
パソコン画面の向こうでおばちゃん教授が一札する。
こちらは一札してから退出ボタンをクリックし、リアペ
を手早く済ませ、パソコンをシャットダウンする。窓の
外を見ると空は高く、鱗雲が風に流されている。

壁掛け時計を見ると12時半。お昼にはびったりな時
間だ。今日は親がいない。昼飯は家にあるものをかき集
めるでもよし、何か買ってくるでもよし。さて、どうし
たもんか。

少し考えてから、俺は薄手のポロシャツを羽織った。
そして自転車に跨る。高校入学に合わせて買い替えた愛
車も乗り始めて6年になる。昼間にも関わらず街に人は
まばらで、俺は思いのままに飛ばした。荷物は財布とス
マホと家の鍵。軽装で涼しくなり始めた風と、まだまだ
夏だと言いつける陽射しの中を駆ける。本当はマスクをつ
けるべきなのだろうが、眼鏡が曇ると危ないからあえて
外しておく。どうせ自転車では三密になんてならないだ
ろう。

10分ちよつとで目的地周辺に辿り着いた。県下一の
規模を誇る商店街だ。1キロ半くらいはあるアーケード
の中にデパート、本屋、ドーナツカフェ、煙草屋、スー
パー、魚屋、服屋、金券ショップ、時計店、ゲーセン、
カラオケ、果ては法具屋までひしめき合っている。人通
りが少なく、自転車を停める場所はすぐに見つかった。
自転車を停めたのは薬局の前。マスクや消毒液が山と
積まれた入り口前の籠を横目に、地下へ続く階段を降り
る。薄暗い地下通路には幾つかの店が並んでいるが、一
番手前の店はシャッターがしてあり、貼り紙が貼ってあ
る。

『外出自粛の影響に伴う経営難により、6月末日を以て

営業を終了させて頂きました。長年のご愛顧、誠にあり
がとうございました』

地下通路を一番奥に行くと、お目当ての店だ。インド
カレー専門店、マサラ。少し秘密基地めいた立地の店は、
昔から行きつけだ。

重い木製のドアを引くと、蝶番が軋む音に合わせて中
からカタコトの挨拶が飛んだ。

「イラッシャマセー」

無言で会釈をしてから二人用の席の片方を陣取る。そ
こまで広くない店内だが、客は俺だけだった。平日なら
サラリーマンやOLで賑わうはずなのに、やはり時勢が
良くないのだろう。

メニューを開く。こうやってメニューを開くのもえら
く久しぶりだ。チキンパラグ、チキンコルマ、チキンム
グライ、様々なインドカレーがある。チキンのみならず
ポークもフィッシュもあるが、それらは頼んだことが無
い。飲み物だってチャイにラッシー、マンゴーラッシー
もある。インドビールに手を出すつもりは無いが、今日
はどれにしようか。

「ゴチューモン、オ決マリデスカ？」

色の黒い店員さんがお手拭きと水を持ってきた。この
店はいつも注文の聞き取りがせつからだ。でも、こちら
もいつまでも迷っていても空腹が癒せない。

「チキンマクニ、3倍、ナンで」

こうやって注文することも、一体いつ以来になるだろ
うか。懐かしさを覚える自分の存在を痛感する。

「チキンマクニ、3倍、ナン。カシコマリマシター」

互いにマスク越しでフガフガしながら注文のやり取り
を交わす。俺はマスクは息苦しくて嫌いなのだが、半年
もこんな生活を続けていたらすっかり慣れてしまった。

でも、家族や親戚の目を気にして外出を控える生活に染まってしまったのは憂鬱だった。この外食も親にばれたら決していい顔をされないだろう。

お手拭きのビニール袋を破り、丸まった中身を広げながら店内を見回す。このお手拭きは他の店では考えられないくらい熱く、端っこを持たないと火傷しかねない。気を付けて広げたらもうもうと湯気が立った。

マスクをずり下ろし、水を一口飲む。レモンを混ぜてあるようで少し酸っぱい。ガラス張りの厨房の向こうでネパール人のおっちゃんがナン生地を片方の掌でくるくるしながら平たく伸ばしている。相変わらず慣れたものだ。店内を支配するのはインド音楽だが、それすらも客の少なさによる静けさを全て埋めることはできず、むしろ際立たせていた。

つかつかとお盆を片手に店員が近寄ってきた。

「スープデス、ドゾー」

それだけ言い、背の低いマグカップに入ったコンソメスープを置く。中に微塵切りの人参が浮いているだけのシンプルなもの、一口嚼ると胡椒がよく効いている。メインディッシュまではもう少し待たされる。遠慮を知らない熱さの汁物をちびちびやりながら、天井の空気を生ぬるくかき回すファンをぼんやりと眺める。

店員が再び近寄ってきた頃には、スープは3割ほど減っていた。この店は味の割に料理を待たせないのが良い。それなりに値が張るから年に数回しか使わないが。

「チキンマクニデス。ゴユックリ、ドゾー」

運ばれてきたのは割と大きめの銀色の皿。楕円形のその平皿の上に焦げ目がついたナンと銀色の浅皿に入ったカレー、申し訳程度のグリーンサラダは銀色の小鉢に入って平皿の隅に乗っかっている。

とりあえず俺はポロシャツの袖をまくり、サラダにフォークを伸ばす。和風ドレッシングで味付けされた人参とサニーレタスのサラダはものの30秒で空になった。

ナンはまだまだ焼き立てと呼ぶに相応しい熱さで、端っこから手でちぎるとそこから勢いよく湯気が立ち上る。一口大にちぎってからチキンマクニに向かい合い、浸す。どろりとした赤っぽいカレーが照明で鈍く照らされる。

口に入れると、熱。爽やかな酸味。そして、結構強烈な辛味。ナンの甘味と合わせると良い塩梅だ。

正直なところ、俺は辛いものが苦手だ。だからかつてはこの店に来ててもそこまで辛くないものを頼んでいた。

3倍の辛味の美味しさを知ったのはいつだろうか、高校の頃には既に食べていたから5年くらい前になる。3倍はこの店では中辛に相当するが、あくまでもそれはインドカレーの基準。市販のレトルトカレーでは辛口くらいに相当する。

またナンをちぎる。黒焦げに膨らんだところを指で押さえると、ぼろぼろと崩壊して陥没する。少し時間が経ってナンの熱さは収まってきたが、代償にナンが少し固くなってきた。

またカレーをつける。具は一口大のチキンが幾つか入っているだけだが、これをナンで掬って食べるのはなかなか難しい。フォークで刺して食べればいいや、と後回しにする。

また口に運ぶ。ナンはもちもちと少し歯ごたえが出てきた。さっきよりも辛味が増しているような気がする。

爽やかな酸味が、俺の手を止めさせようとしなない。ナンは徐々に面積を減らしていく。体積と形容するのが正しいのは分かるが、このへらべったい形状を見るとどうしても面積と捉える方がピンとくる。

出入口のドアが軋む音がした。OL二人組が入り、店の奥に陣取る。他に人がいないこともあり、注文する声丸聞こえだ。のっぽはチキンパラグ、太いのはチキンムグライを頼んだようだ。

ナンをちぎる手を休め、すっきり冷たくなったお手拭きでナンの油を拭う。そしてサラダで使ったきりのフォークに手を伸ばす。ここの辺で具のチキンに手を出そう。その前に水を飲む。カレーを小休止しても辛味が引かない。レモン汁を染み出させた水はよく冷えていて、氷が唇に阻まれてカラカラと音を立てる。

「チキンパラグノ方……ハイ、ドゾー」

向こうの客にも料理が届いたようだ。チキンパラグってことは、もしかして。

「え、何それ、緑色やん！」

「凄いやろ、美味しいがで」

「えー、ほんま？」

太い方が驚きの声を上げたが、そりやそうだ。チキンパラグはほうれん草のカレーで、普通のカレーとは違って緑褐色をしている。恐らくこの店で一番の変わり種だろう。俺も何回か食べたが、味は普通のチキンカレーと何ら変わらない。そう思って横目で見てみると、ちぎっているナンも緑色だ。ほうれん草のナンもあるとは聞いていたが実物は初めて見た。普通のナンよりも小ぶりに見える。

チキンを口に運んでいると、太い方のOLにも料理が届いた。チキンムグライ、卵とじにしたカレーだ。味がぼんやりしていてあまり好きではない。他にもこの店にはチキンコルマというナッツがふんだんに使われている……らしいがそのような形跡はあまりないカレーもあったりする。ちなみに今俺が食べているチキンマクニはト

マトをふんだんに使ったカレーだ。これは赤っぽい色も爽やかな酸味も真正銘、トマトのものだ。

気が付くとチキンは今フォークに刺さっているもので最後だ。と言っても、味付けがカレーなだけで何の変哲もない。口の放り込むとフォークを皿の端に置き、またナンをちぎる。最初は二等辺三角形みたいな形をしていて皿の半分以上を占拠していたナンも、あと4割くらいしか残っていない。カレーをつけて、口に放り込む。カレーも熱さが和らぐに比例して辛味が穏やかになる。いや、少し舌が慣れただけかもしれない。水を飲み干して、またカレー。辛味が復活した。店員が銀色のポットから水を注いでくれた。この店はやたらと水を飲ませようとする。

黙々と一人で食べるのも悪くない。でも、気の置けない友人とわいわい食べるのが少し懐かしくもある。目の前の空っぽの席を見ると、世界が変わる前にサークルで呑みに行ったことや、賑やかな学食を思い出したりする。帰省する直前に横浜で友人とお好み焼きを食べたりもした。彼は元気だろうか。

この店でもよく友人と食べた。高校の帰りや、卒業後に集まるのも大体ここだった。俺は地元に戻っているのに、地元の友人と対面で会うことは憚られる。歯がゆさを紛らわせようと、乱暴にナンを口に詰めた。冷めてもなお焼けるような辛味に、3倍に抑えておいて良かったと思う。この店は追加料金を支払えば辛味を50倍まで設定できるらしいが、そんなものを頼んだら自衛隊の化学防護隊でも呼ぶ羽目になりそうだ。メニューには50倍のところ荒ぶる像のイラストが描かれている。

大都会での日々は、もしかして長い夢だったのだろうか。浪人も東京だったから、二年近くを東京で過ごした

ことになる。それがこうもあっさり消えてしまうとは、人生何が起るのか分からない。次に戻れるのはいつになるのか、もしかしたら二度と戻れないのか、戻っても俺のことは忘れ去られているのではないか。

だいたい思考がおかしくなっていることに気付いて我に返る。浅皿はほぼ空になっていて、ナンは2割ほど余っている。とりあえずナンをちぎり、カレーの残りをさらばえる。しかしさらばえたところで大した量はなく、口に放り込んでも既に口内を支配するカレーの余韻が勝る始末だ。

ふと思いついてスープを飲み干す。まだ熱が残っており、それがチキンマクニの余韻と合わさって辛味というか、ぴりぴりと舌に痛みを引き起こす。マグカップの底に黒胡椒の顆粒が残った。

残るはナンだけだ。この店は学生相手には気が良く、普通のナンならタダでお代わりできる。チーズナンとかそういうのは対象外だが、俺はナンのお代わりサービスのお世話になったことは無い。そこまで食べられない。ナンはすっかり冷めていて、そのぶんほんのりとした甘味が強く感じられた。あと焦げの苦みも。もちもちと歯ごたえがあるナンを食べ切り、完食だ。

レモンが染み出した水を飲み干すと、待つてましたとばかりに店員が近寄って来る。俺はそれを手で制し、口元を拭う。マスクをつけてからレジに向かう。カレーを食べた後につけるマスクって軽く拷問だな、なんて考えながら財布を開く。透明なビニールフィルムで隔てられた先の店員に支払いを済ませ、一礼して店を出る。ごちそうさまの一言すら発することが憚られる世界は、どうも好きになれない。

「アリガトウゴザイマシター」

階段を上がり地上に出る。ガラス張りのアーケードに降り注ぐ陽光は、夏の盛りをとうに過ぎたはずなのに元気がいっぱいだ。

さて、今日の午後は授業が無い。課題は小一時間もあれば終わる。どう使おうか考えながら俺は愛車に向かう。チキンマクニの辛味のせい、少し胃と食道が焼けている気がする。

今は昼下がり。まくったポロシャツの袖を直す必要は無さそうだった。マスクを外し、眼鏡の曇りを取る。カレーの余韻に外の空気が優しい。

……次にマサラを訪れる時、シャッターは開いているだろうか。貼り紙はあつたりしないだろうか。

一抹の不安を振り切ろうと、力任せにペダルを踏む。初秋の風に吹かれながら、晩夏の陽射しに照らされながら、俺は帰路に就く。

帰り道も人影はまばらだった。